2026年9月 発行

ほくほくフィナンシャルグループ
Hokuhoku Financial Group, Inc.

# 海外事務所レポート



## シンガポールの街角で感じた多文化共生

北陸銀行 法人ソリューション部
シンガポール駐在員事務所
トレーニー　笠間　洋佑

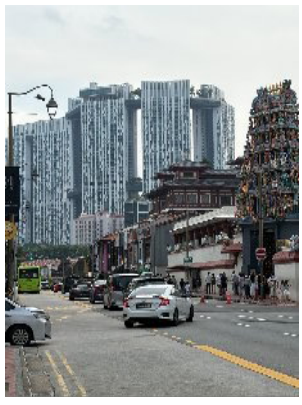
## １．はじめに

近年、日本ではインバウンド観光客や外国人就労者が増加し、外国の方と接する機会が年々増えていますが、同時に、異文化による軋轢も生まれつつあるという報道を耳にします。今夏、私はトレーニーとしてシンガポールを訪れ、様々な国の人や文化が自然と共存・融合し、互いに調和しながら社会を形成している姿を実感しました。本レポートでは、多様性が日常生活に溶け込んでいるシンガポールの様子をご紹介します。

## ２．多様な文化との共存

シンガポールは地理的な特異性を生かし、アジアのハブとして世界中から人やモノを受け入れてきました。この国は、世界でも稀な多民族・多言語・多宗教国家として知られており、中華系（74%）、マレー系（13.5%）、インド系（9%）、その他（3.5%）の民族が共存しています。公用語は、マレー語（国語）、英語、中国語、タミル語の4言語ですが、英語が共通語として広く使われています。宗教も仏教、キリスト教、イスラム教、ヒンドゥー教などが共存しています。街中を歩いていると、様々な言語を耳にし、多様な民族の人々が行き交う姿を目にします。その光景に、多様性がごく自然に受け入れられていることを強く感じました。

街の中心部はガラス張りの高層ビルが立ち並ぶ近代的な街並みが広がり、非常に洗練された印象を受ける一方、少し足を延ばすと、チャイナタウン、リトルインディア、アラブストリートといった異国情緒あふれるエリアを体感できます。さらに、仏教・ヒンドゥー教の寺院やイスラム教のモスクなどの宗教施設や文化的建築物が高層ビルに隣接する光景は日本ではあまり見られないものであり、伝統と近代が上手く調和している印象を受けました。





左：近代的な建物、右：中国系の寺院（筆者撮影）

また、シンガポールには中国やマレーの伝統にヨーロッパ文化の要素を融合させて築き上げた「プラナカン文化」が息づいています。鮮やかな色調と独特な文様が特徴であるプラナカンの建築物や雑貨は一見派手に見えますが、伝統的価値が高いと評価されています。



伝統的建築　プラナカンのショップハウス（筆者撮影）
（建物の1階が店舗や事務所、2階が住居となっている）

## ３．食文化の融合

シンガポールには母国料理と呼べる料理はないと言われますが、様々な文化が融合し、独自の食文化として発展しています。代表的な料理は、チキンライス、バクテー、チリクラブ、ラクサなどです。見た目は中華系に近く、味や香りは南国らしさがあり、一皿の中に文化の重なりを感じました。



チキンライス

また、シンガポールでも日本食を食べられる場所は意外と多く、地元のスーパーでも日本の食材や食品を容易に買うことができます。海外からの文化を受け入れる土壌があるからこそ、日本食も日常的に受け入れられているようでした。

## ４．多様な人々が暮らす仕組み

現地で生活するうえで物価は気になる点ですが、多様な人々が共に暮らすための環境が整っていると思いました。シンガポールは世界で最も物価が高い国と言われており、飲食店では日本より高めの価格設定に感じる一方、ホーカーセンターのように各国の料理を手ごろな価格で楽しめる場所も多く、生活必需品や食材も比較的安価に手に入ります。前述のとおり、海外の文化が自然と生活に溶け込んでいる点が大変印象的で、多文化共生を支える仕組みが街中に根付いていると感じました。

## ５．おわりに

シンガポールは様々な文化を受け入れながら発展してきた国であり、柔軟性や寛容性を感じます。同時に、規律を重んじる厳しい側面もあり、その両面が社会の秩序と安定を支えているように思います。日常的な異文化理解によって成長を続け、アジアの中での存在感を強めていくシンガポールの姿には、日本が学べる点も多いのではないかと思います。

＜ご注意＞
文中意見は筆者の個人的見解であり、北陸銀行としての見解の反映ではありません。当レポートは作成時点の経済状況に基づき、情報提供のみを目的に作成したものです。記載内容についてはご利用者の判断と責任のもと、ご利用くださいますようお願いいたします。



発行：北陸銀行 法人ソリューション部 グローバルビジネス推進室
〒930-8637 富山市堤町通り1-2-26 TEL (076)423-7111